

# 藤堂高虎 188年 400年 三重大学



入徳門・藩校 有造館の正門  
(津市お城公園内)

## 2008年 藤堂高虎が津に入府して400年



藤堂高虎像(四天王寺蔵)

慶長13年(1608)、高虎は、徳川家康の厚い信頼のもと、伊予今治(愛媛県今治市)から伊賀一国・中部伊勢へ転封。本城津城と支城上野城の城主として藩政を始めました。以後、藤堂藩は32万石の大藩として、12代の藩主を経て明治を迎えます。

### 藤堂藩と三重大学の関係

～高虎から始まる藤堂藩は、  
学問の盛んな藩～

歴史の続きは  
P15～16を  
見てね



#### 「総合大学」有造館の誕生

有造館は、藤堂藩十代藩主 藤堂高兎が文政3年(1820)に設立した藩校  
有造館は、全国的に著名な学者である猪飼敬所や齋藤拙堂などを擁し、学問水準の高い藩校として知られていた。文武両道を重視し、天文・算術・医術(蘭方も含む)などの理系教育も充実しており、東海地域における最先端の教育体制が完備されていた。  
たとえば、『資治通鑑』(司馬光が編纂した中国の代表的歴史書、諸藩の教科書になる)を日本で初めて版行したり、全国に先駆けて種痘をおこなったりしたことが特筆されます。

#### 有造館 有名教授陣

- 津坂東陽(漢学・医学)
- 猪飼敬所(儒学)
- 齋藤拙堂(漢学・蘭学)
- 上野彦馬(蘭学・化学・写真家)

#### 有造館



#### 師範有造学校から三重大学教育学部まで

明治維新後、藩校である有造館の施設を利用して師範有造学校が開校された。後に三重師範学校となり、昭和24年には三重大学学芸学部、昭和41年には教育学部に改組され現在に至っている。有造館が津城内に置かれた関係から(現NTT津周辺)、教育学部は上浜キャンパスに移転するまでは旧城内の丸ノ内キャンパスにあった。

● 津藤堂藩藩校「有造館」の「有造」の由来について  
孔子が編集したとされる『詩経』の大雅文王(篇名)に下記の詩があります。

ゆえに(肆)成人は徳あり、小(子)もなす(造)あり

思齊「肆成人有徳 小(子)有造」(傳)造 為也。  
「周の文王は徳に優れた方であったから、その配下の大夫・士は有徳の人々であり、それらの子弟たちも、徳を成就することになる。」という訳解になります。

えっ!!  
三重大学は、  
1820年から続いて  
いるんだ



有造館は、  
優れた藩主の下で、  
藩士の子弟達が有徳者となる  
ために学問修養する場  
という意味だね

▼博物館明治村



#### 今も残る三重師範学校校舎

師範有造学校が手狭となり、明治11年(1878)、津城内の西堀端に新校舎が建設された。当時は、三重県を代表する洋風建築として県庁舎とともに有名だった。現在は両建物ともに明治村で公開されている。

# 藤堂高虎

～藤堂藩のいしずえ～



三重大学教育学部・教授  
藤田 達生 Fujita, Tatsuo

【URL】藤田研究室 <http://www.cc.mie-u.ac.jp/~le21101/>  
織豊期研究会 <http://133.67.82.117/frame.html>  
伊勢中世史研究会 <http://mietyusei.hp.infoseek.co.jp/index.htm>

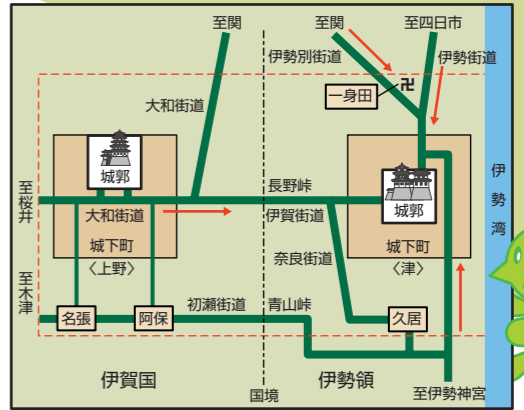
藤堂高虎から始まる藤堂藩は、江戸時代において一度も改易されることなく、伊賀・伊勢の地を守り、文化を受け継いできました。さて、高虎とは？



## 津・上野の町づくり

### ◎戦国の世にありながらオープンな町づくり

町のなかに街道を引き込んでメインストリートにする。「津」は、すべての人・物が集中する東海地域を代表する城下町へと成長。江戸時代は、名古屋に次ぐ人口。明治22年、東海地区初の市制。



高虎から2代、3代藩主へと受け継がれ約90年かかって一段落

### ◎百姓・町人が安心して暮らせる領地づくり

災害対策・新田開発・灌漑工事  
重臣 西嶋八兵衛之友(土木技術家)は、難工事の末、慶安元年(1648)に雲出用水(灌漑用水)を完成(600町分の水田を潤したといわれる)。



西嶋八兵衛之友



「江戸時代の設計者」異能の武将・藤堂高虎 著：藤田 達生

## 幕府からの厚い信頼

### ◎重臣会議への出席も許された唯一の外様大名

大名は徳川将軍家との関係によって「親藩」「譜代」「外様」に分類され、それぞれ待遇や役割の違いが大きかったが、高虎は、幕府にとって重要な政務を決定する会議にも出席する。

「徳川実紀」によると、家康が死に臨んで、もし天下をゆるがすような兵乱が発生した場合、高虎を「将軍家の先陣」に指示するほど

### ◎関ヶ原の戦いで、東軍につき西軍内応工作



高虎 関ヶ原合戦図屏風(関ヶ原町歴史民俗資料館蔵・レプリカ)

### ◎戦で荒れ果てた地域社会を復興すべく、「藩」の成立に力を注ぐ

「藩」=分権国家を構想した治者として他の大名も追随。(江戸幕府の法令のなかに「藩」という言葉も規定もない)  
「藩」は、徳川幕府より預けられた領国において、独自の立法・行政・司法の権限と財政基盤をもち、家臣団が役人として地域支配に責任を果たした。

自分の領地だけでなく肥後熊本、讃岐高松、陸奥津などにおもむき藩政の立て直しに尽力

## 「豊臣秀長」重臣時代に実力を培う

～高虎が生涯にわたって崇敬～

### ◎高虎の政治思想

「渡り奉公人」として何度も主君を変えてきましたが、牢人時代、秀長に見いだされ、秀長の重臣として豊臣政権を支えることになる。「豊臣秀長」が52歳で病没し、主君のなしえなかった「安定した武家政権の確立」を願い、やがて家康の参謀役となることで幕藩体制国家を成立させた。

### ◎高虎の人脈

当時の「秀長」の周りには、当代きっての文化人が結集し、家臣団の才能を鍛えた。その人脈を高虎が引き継ぎ、やがて寛永文化が開花することとなる。

近衛信尋(関白)、千利休(茶人)、古田織部正重然(茶人大名)、小堀遠江守政一(茶人大名・娘婿)、中井家(法隆寺大工)、甲良家(京都建仁寺大工)

慶長12年十七回忌  
元和9年三十三回忌を盛大に執り行うなど、終生秀長の菩提を弔いました

### ◎理想実現のため

「世渡り上手」と言われていますが、それは、平和な世の中を求め自らの判断で牢人\*から這い上がってきた真正銘の戦国武将の証

【主な主君】  
浅井長政、阿閉貞征、磯野員昌、織田信澄、豊臣(羽柴)秀長、豊臣秀吉、徳川家康

\*牢人:主家を去って俸禄を失った武士のこと

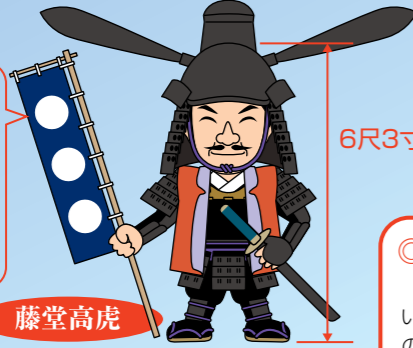
### ◎名築城家

3大築城家  
藤堂高虎・加藤清正・黒田如水

### 高い技術力を持つ職人集団

甲良大工衆  
優れた築城技術  
穴大衆  
石垣の普請

旗印：白餅(城持ちにかけて)  
流浪していた時に店で餅を無銭飲食してしまい、余りの食べっぷりに店主よりお代免除に路銀まで頂戴しました。その時の恩を忘れないために旗印に。



藤堂高虎

1556年(弘治2)	近江国(滋賀県)に生まれる
1570年(元龜元)	浅井長政に仕える。姉川の合戦で初陣。二年後に浅井家を出て、阿閉貞征など次々に主君を変える
1576年(天正4)	羽柴秀長に仕え、三百石に
1581年(同9)	結婚(一色家・久芳夫人)
1591年(同19)	秀長死去、秀長の養子秀保に仕える
1595年(文禄4)	秀保死去、出家しようが高野山に登るが、豊臣秀吉の説得で下山。伊予板島(後の宇和島)七万石に
1600年(慶長5)	関ヶ原の戦いで東軍に属し勝利。二十万石に
1604年(同9)	伊予今治(愛媛県今治市)に築城。後に江戸城設計に携わる
1608年(同13)	伊予今治から伊勢・伊賀へ国替え。計二十万石余に
1615年(元和元)	大坂夏の陣に従軍。二十七万石余に。二年後、三十二万石余
1630年(寛永7)	眼の病気で失明し、十月五日に死去。享年七十五歳